

國學院大學學術情報リポジトリ

伝統文化リサーチセンター資料館：

--祭祀遺跡に見るモノと心--部門の研究と公開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002013

伝統文化リサーチセンター資料館

—祭祀遺跡に見るモノと心— 部門の研究と公開

「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

はじめに

平成20年（2008）3月、竣工になったアカデミック・メディアセンター地下1階に伝統文化リサーチセンター資料館の一部が開館、同年10月1日には、平成19年度文部科学省オープン・リサーチセンター整備事業に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業推進の成果公開施設として全面開館の運びとなった。

國學院大學は創立以来、日本文化の基層となる神道を建学の精神に置き、「主体性を持った寛容性と謙虚さ」という特質が、どのように日本の文化に反映され現在に至ったのか、と言う点について様々な学問領域から考証・研究を重ねてきた。「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」は、本学の研究・教育能力と成果公開機能の強化・向上を目指し、伝統文化リサーチセンターを主体に、多様な学術資産を研究対象とする研究の推進と、若手及び外部研究者を広く受け入れ、組織化した研究体制の構築、研究成果の展示やWeb上での公開等を進めることにより、生活の中で作り上げられた「モノ」と、その背景にある「心」の関係を明らかにし、そこから抽出される伝統文化が育んだ知恵と実践の社会的意義を究明・発信することを目的としている。伝統文化リサーチセンターでは、「祭祀遺跡に見るモノと心」、「神社祭礼に見るモノと心」、「國學院の学術資産に見るモノと心」以上3つの研究組織を編成し事業を推進しており、「モノ」の核となっているのは、昭和3年（1928）樋口清之博士によって創設された考古学資料館であり、昭和38年（1963）に開館した神道資料館、さらに120年余りにわたって蓄積されてきた文学、史学、神道学などの様々な学術資産である。

本稿では、現在「祭祀遺跡に見るモノと心」をテーマに研究を推進している考古学部門の公開施設について開館以来、現在に至る経過と、施設、展示資料の変遷を踏まえ研究推進の現状とこれまでの成果に

ついてについて報告するものである。

國學院大學の考古学研究略史

國學院大學における考古学研究の歴史は、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎博士に師事した鳥居龍蔵博士が大正12年（1923）に教授として赴任してからのことである。少年期より鳥居博士の薫陶を得ていた大場磐雄博士は、大正7年（1918）國學院大學に入学、鳥居博士の下で考古学研究を重ね高校教員、内務省勤務を経て、昭和24年（1949）國學院大學教授として着任「神道考古学」という新分野を開拓した。大場博士と共に國學院大學の考古学の黎明期を支えた樋口清之博士は、昭和2年（1927）國學院大學に入学、やはり中学時代より師事した鳥居博士の下で考古学を学び、昭和7年（1932）卒業と同時に助手として就任以来、約半世紀にわたって後進の指導にあたった。後に考古学から発展させた「梅干しと日本人」に象徴される独自の日本文化論は、日本人のアイデンティティを鼓舞し、多くの人々の賛同を得るところとなった。

戦前の考古学研究は、東京帝室博物館の日本考古学会、坪井正五郎博士率いる東京帝国大学理学部人類学教室の東京人類学会、浜田耕作博士の京都帝国大学考古学教室が指導的立場にあり、私学において本格的な考古学講座を有している大学は極めて希な存在であった。

昭和3年、陸軍大臣大山巖の次男、大山柏博士は陸軍を少佐を退役し、渋谷区隠田（現渋谷区神宮前5丁目3）大山公爵邸内に「大山史前学研究所」を設立、東京帝大人類学科修了の俊英、甲野勇、宮坂光次を研究員に迎え、民間の考古学研究団体を組織した。隠田の研究所と國學院大學は、徒歩で行き交うことの出来る距離にあり、宮崎紘・稻生典太郎といった國學院大學の学生が研究のため同研究所に出入りしていたことが記録されている。研究所が発行

した昭和10年（1935）の史前学会幹事名簿には、樋口博士・大場博士が名を連ねていることから國學院大學の考古学徒と大山史前学研究所は、昭和20年の東京大空襲で灰燼に帰すまで、密接な関係にあったことを示している。樋口博士自身も中学生の頃に大山邸を訪ねた事を述懐しておられる。（「大山柏先生に師事して」1996『古代文化』第48巻11月号）

樋口清之博士による考古学陳列室の創設

現在、伝統文化リサーチセンター資料館の建つ常磐松校地は、創設者である樋口清之博士の先祖にまつわる単なる偶然とは思えない縁によって結ばれている。

この土地には、文政から安政頃（1827～1855）大和國芝村藩織田家の下屋敷があり、それに隣接して薩摩鹿児島藩島津家の下屋敷（現在の常陸宮邸周辺）があった。安政2年（1855）11月4日に起こった八丈島近海を震源とするM6.9の地震（安政の大地震）で大きな被害を受けたことによって、現在の港区にあった上屋敷の機能をこの地に移し、藩主島津斉彬が移り暮らした。篤姫（天章院）は、この地から徳川家に輿入れしたと言われている。織田家に仕えた樋口博士の祖父、宮部清吉郎は、鹿児島藩士の樋口家との養子縁組が行われ、樋口清兵衛を名乗ると同じ頃、この土地は鹿児島藩所有となった。維新後、島津家下屋敷一帯は皇室の御料地となり大正12年（1923）國學院大學が飯田橋よりこの地に移転、昭和2年に樋口博士が入学されるのである。偶然とは思えない奇しき縁を感じさせる逸話である。

現在約10万点に及ぶ収蔵資料を誇る考古学資料館部門の創設は、昭和3年（1938）当時学部学生であった樋口博士が、中学時代奈良県内において自身で蒐集された考古資料約4,000点を大学に寄贈されたことに開設の端を発する。指導教員であった鳥居龍蔵博士等の後ろ盾を得つつ、当時の事桑原芳樹専務理事にその必要性を訴え、それが認められたのである。さらにベニヤ板商の新田長次郎氏の寄付を取り付け、加えてご尊父樋口清二氏等から篤志を受けて展示ケースを設え、旧本館2階、約30坪の部屋を資料陳列室として開館したのである。什器としては、竪型展示ケース3台、覗きケース4台、四方ガラスケース1台、竪型覗き合体ケース1台を設える程度の施

設であったが、その一歩は考古学研究に特化した大学博物館という当時まだ他に例を見ない新たな地平を目指すものであった。昭和5年（1930）には、名称を考古学陳列室から考古学資料室に改名し、さらなる発展を目指したのである。

このように陳列室の設立計画を組上にあげ実践されたのはとりも直さず樋口博士ご自身であったが、資料の寄贈者やその協力者として上代文化研究会会長鳥居龍蔵博士、中川徳治、丸茂武茂、福田耕治郎、雨宮祐、新倉借光、神林淳雄、水野久尚、三木文夫、森貞治郎、江藤千万樹、長田実等の諸博士、先生、院友諸先輩の理解と協力を得て成し得た偉業でもある。

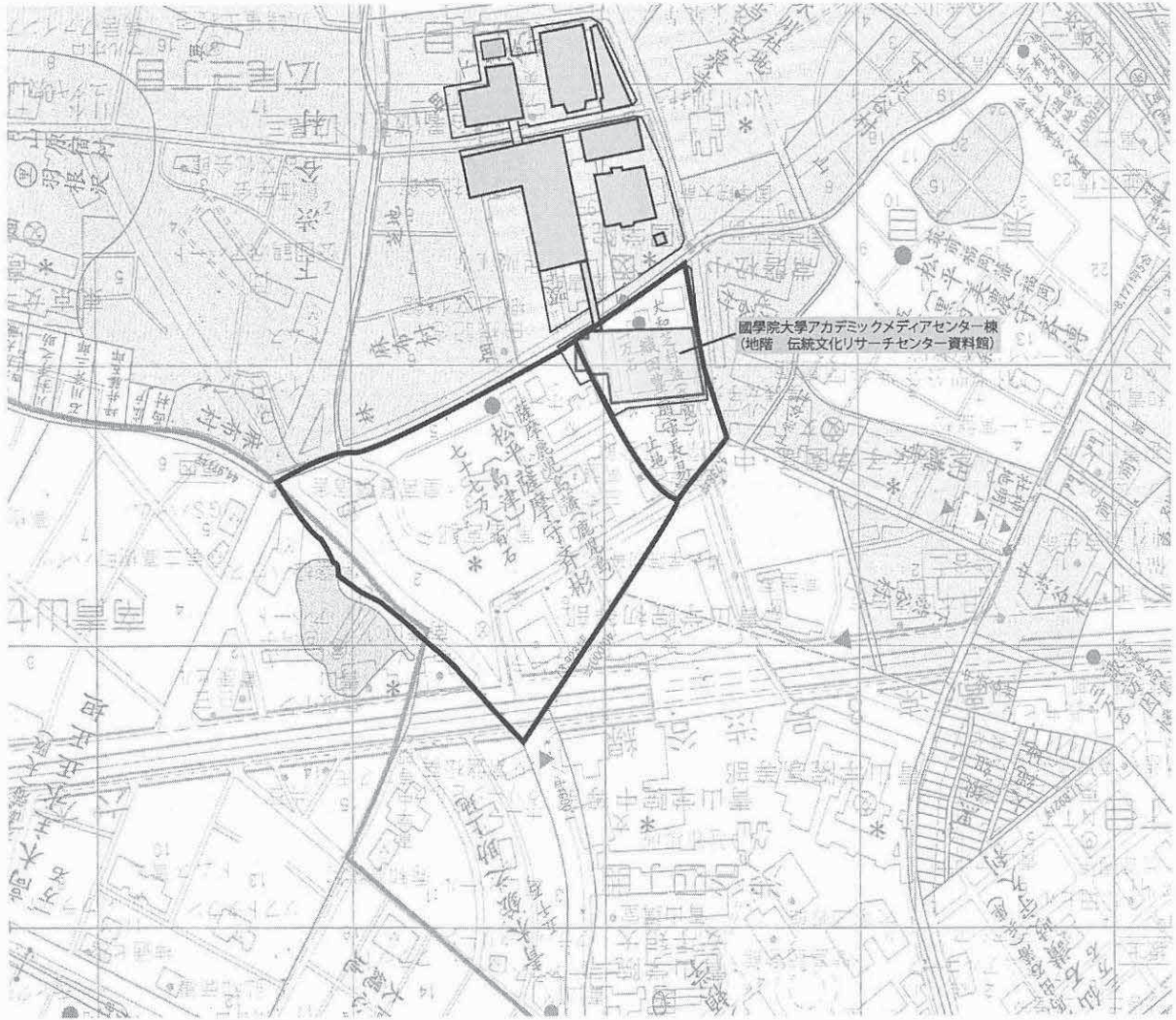
当時の陳列室の状況を伝える資料は、今現在ほとんど残っていないが、資料台帳と関係各位より寄託頂いている写真類のみがその状況を伝える。実物資料としては、収蔵資料台帳に記載される奈良県下をはじめとした各地の考古資料の中でも、樋口博士自身がラベルを書いて整理した石鏃類（写真）や大場磐雄博士の寄贈資料等が開館から昭和5年頃にかけての資料として確認できる。

戦中には、御真影金庫のある学長室の上に、曾谷貝塚の人骨が展示してあるということで、昭和18年（1943）の学生大会の決議によって、考古学は不敬の学問として追放されようとした逸話も残っている（加藤有次 1997 「樋口清之先生を悼んで」『古代文化』第49巻7号）。このような戦中の苦境を耐え忍び、施設を残したこと、またその運営資金についても全て樋口博士が負担され、運営維持が適った点についても特筆すべきところであろう。

考古学資料室から資料館へ

昭和20年、樋口博士が教授に就任されてからは、益々資料室の充実に邁進され、その頃には資料台帳に記載された資料数は登録番号を付したもののだけで約2,000点が確認される。開館から約20年、樋口博士はもとより多数の関係者がその存在価値を認め、様々な考古資料を学術研究のために資料室に寄贈していることが確認できるのである。

戦後の民主化とそれに伴う科学的歴史観の導入は、考古学研究にも新しい流れを生み出した。昭和21（1946）年、群馬県赤城山麓を踏査していた相沢忠



國學院大学渋谷キャンパス位置図

現在と安政年間の土地利用状況

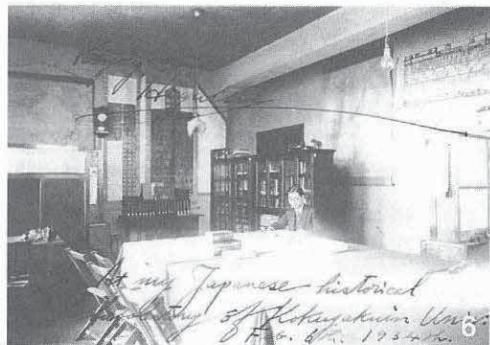
(児玉幸多監修 1994『復元・江戸情報地図』朝日新聞社より)

現在、アカデミックメディアセンター棟の建つ土地は、文政から安政頃（1827～1855）大和國芝村藩織田家の下屋敷があり、それに隣接して薩摩鹿児島藩島津家の下屋敷（現在の常陸宮邸周辺）があった。安政の大地震後、現在の港区にあった上屋敷の機能をこの地に移し、藩主島津斉彬が暮らした。篤姫は、この地から徳川家に輿入れしたと言われている。織田家に仕えた樋口清之博士の祖父、宮部清吉郎は、鹿児島藩士の樋口家との養子縁組が行われ樋口清兵衛を名乗ると、同じ頃土地は鹿児島藩所有となる。維新後、島津家下屋敷一带は皇室の御料地となり大正12年（1912）國學院大学が飯田橋よりこの地に移転、偶然とは思えない奇しき縁を感じさせる。

兵庫頭様位牌

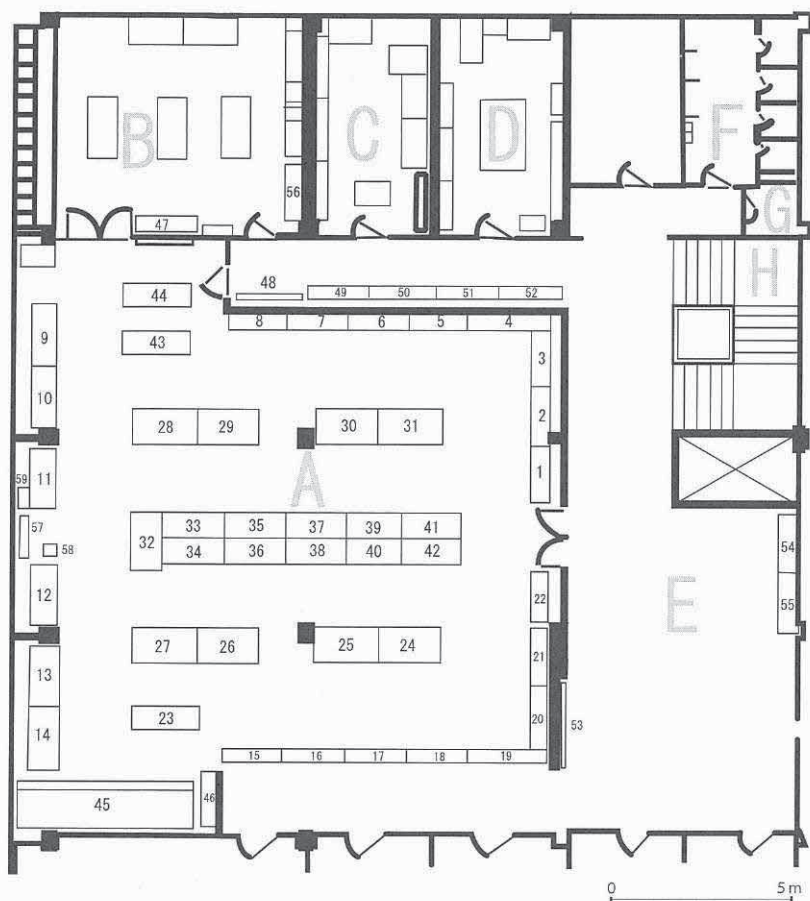
樋口清兵衛が供養していた薩摩藩祖島津義弘公の位牌。恐らく、江戸時代、島津家縁者に武運長久を願い分祀されたものであろう。樋口博士は、島津家ゆかりのこの地にあるのが相応しいと考え、考古学資料館に寄贈された。「天正年中 兵庫頭様御代々 武運長久」とある。





- 1 樋口清之博士と鳥居龍蔵博士
- 2 昭和3年頃の考古学資料陳列室（本館2階）
- 3 写真2 机上の資料（中学時代に蒐集したもの）
- 4 上代文化研究会 鳥居龍蔵博士（中央）
樋口清之博士（向かって右）昭和6年（1931）

- 5 展示室の樋口博士
- 6 執務中の樋口博士
- 7 昭和10年頃の考古学資料資料室

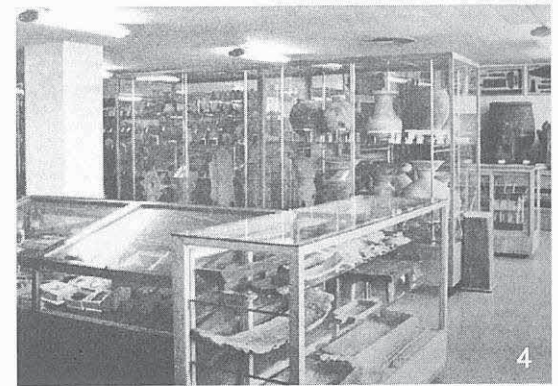


- | | | | | | |
|-------|--------------------------|-------|------------------------------------|----|---------|
| A | 考古学資料陳列室 | 28~31 | 古墳文化・埴輪 | 55 | 歴史時代・陶器 |
| B | 考古学資料整理室 | 32 | 神奈川県小田原市下曾我遺跡出土土器 | 56 | 博物館学資料 |
| C | 考古学第1研究室 | 33 | 古墳文化・須恵器・土師器 | 57 | 歴史時代・板碑 |
| D | 考古学第2研究室 | 34 | 神奈川県小田原市下曾我遺跡出土土器木器 | 58 | 中国出土・銅鼓 |
| E | ロビー | 35 | 弥生文化・土器底部剥殻痕炭化米・各種穀物標本・自然木炭・古代木炭資料 | 59 | 歴史時代・甲冑 |
| F | W.C. | 36 | 祭祀遺物 | | |
| G | 湯沸室 | 37 | 製鉄・製陶遺物 | | |
| H | 階段 | 38 | 古墳文化・顔料・塗彩乾漆片・石枕 | | |
| 4 | 無土器文化 | 39 | 古墳文化・玉類・製玉資料 | | |
| 2・3 | 縄文式文化・前期土器 | 40 | 古墳文化・金属製品・馬具鉄? | | |
| 4 | 縄文式文化・中期土器 | 41 | 古墳文化・金属製品(鏡) | | |
| 5・6 | 縄文式文化・後期土器・石器 | 42 | 古墳文化・金属製品(鉄刀身・刀子他) | | |
| 7・8 | 縄文式文化・後期土器・石器 | 43 | 縄文文化・狩猟・漁労具 | | |
| 9 | 縄文式文化・装身具 | 44 | 縄文文化・人体埋葬標本 | | |
| 10 | 縄文式文化・石器 | 45 | 弥生文化・甕棺・登呂遺跡出土民家柱 | | |
| 11 | 中国出土土器・石器 | 46 | 神奈川県小田原市下曾我遺跡出土土器木器 | | |
| 12 | 中国出土土器・石器・金属器 | 47 | 弥生文化・貝塚断面標本 | | |
| 13 | 中国出土古銭・陶器 | 48 | 歴史時代板碑 | | |
| 14 | 中国出土磚・アメリカ出土土器・石器・骨格器・織物 | 49~52 | 博物館学資料 | | |
| 15~18 | 古墳文化・須恵器 | 53 | 歴史時代・五輪塔・宝篋印塔 | | |
| 19 | 歴史時代・蔵骨器 | 54 | 弥生文化・土器 | | |
| 20・21 | 歴史時代・古瓦 | | | | |
| 22 | 仏教関係資料・和鏡・中国鏡 | | | | |
| 23 | 模造木造家屋 | | | | |
| 24 | 古墳文化・陶棺 | | | | |
| 25 | 弥生文化・土器・古墳文化・土師器・埴輪 | | | | |
| 26 | 弥生文化・土器・古墳文化・埴輪・土師器 | | | | |
| 27 | 弥生文化・土器・古墳文化・埴輪・土師器 | | | | |

考古学資料室時代(1960~1968)展示室平面図と展示資料(旧図書館2階)



考古学資料室 本館2階の展示室と収蔵庫



- 1 全景
- 2 形象埴輪
- 3 甕棺の露出展示
- 4 下曾我遺跡の資料

考古学資料室 旧図書館2階（1960～1968）の展示室

洋による岩宿遺跡の発見、昭和25年（1950）の明治大学による神奈川県夏島貝塚の発掘調査などは、静岡県登呂遺跡の発掘と並んで、以降の考古学研究に指導的役割を果たした。昭和40年代後半以降には、田中角栄首相の日本列島改造論の下、空前の国土開発ブームに突入し、考古学の主流は、純粋な学術調査から開発による遺跡保護へと転換したのである。それまで学問的課題のもと、純粋な学術調査を目的として進められてきた研究は、今度は開発による遺跡の大量破壊という現実と直面し、埋蔵文化財としての遺跡の保護が正面から取り上げられる機運が生じたのである。各地方自治体は、大規模開発に伴って文化財保護法に依拠する埋蔵文化財調査の必要性から、考古学専門職員を採用することが迫られた。國學院大學から数多くの専門的人材を輩出できたのも、戦後まもなくから先んじて考古学の専門教育を推進し、多数の実物資料を擁した考古学資料室とそこに育った幾多の考古学徒が学内外に腰を据えていたからであろう。

考古学資料室は、昭和27年（1952）には、博物館相当施設と認定され、昭和35年（1960）には、旧図書館2階に新天地を得ることとなった。同所には、考古学研究室、資料整理室が置かれ、発掘調査で得られた遺物の整理、研究、公開機能が集約され、本学の考古学研究体制の強化が図られることとなり、約240㎡の展示室には、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代、中国その他の外国資料が時系列に配置され、蓄積された多数の資料が公開された。ここに今日に引き継がれている時系列分類展示のスタイルが確立したといってもよからう。この頃の新収蔵資料で注目されるのは、昭和32年（1957）の豊島昂氏寄贈の秋田県鹿角市尾去沢出土の縄文晩期土器群、昭和35年（1960）の山梨県花鳥山遺跡の縄文前期土器群、昭和36年（1961）発掘の秋田県能代市大野遺跡出土資料に代表される縄文関係資料や、昭和40年代には、備前、常滑といった中・近世陶磁器関係資料を積極的に蒐集している。この頃の展示資料の中で、特に目を引くのは「博物館学資料」で、昭和32年（1957）に開講した博物館学講座のための研究資料として、複製品などの展示資料を配置したものであった。昭和40年（1965）には常磐松1号館地階に収蔵庫（74.12㎡）を設置し、こ

れまでに蓄積された資料の管理が適ったのである。

研究、資料管理体制の強化という観点から昭和35年（1960）より専任学芸員（初代学芸員 加藤有次名誉教授）が配置され、昭和41年（1966）から平成14年（2002）までは館長（兼担）、専任学芸員2名、運営委員4名（兼担）、専任事務職員1名体制となった。

常磐松2号館時代の考古学資料館

昭和43年（1968）には、常磐松2号館の竣工に伴いその1階に移転し、施設を拡充し、収蔵展示室（316.00㎡）、常磐松2号館地階 収蔵庫（154.08㎡）、考古学資料館研究室（26.23㎡）となった。広くなった展示室では、これまで同様の時系列分類展示を踏襲するものであったが、展示資料数は圧倒的に増加し、縄文～古墳時代資料に加え、昭和40年代から精力的に蒐集された中・近世陶磁器関係資料や民族資料等も多数公開されることとなった。ここに至るまで、購入資料の多くは、樋口博士自身の資金によるものが多数を占めたが、昭和50年代には大学予算での資料購入が認められ、昭和58年（1983）創立100周年事業の一環として購入が適った袈裟襷文銅鐸（伝滋賀県小篠原大岩山出土）など、今日博物館の目玉となっている多くの資料を加えることができたのである。

また、ここに至るまでには、樋口博士の精力的な蒐集の他に、院友その他の関係各位の篤志による資料の寄贈も多数あった。昭和57年（1982）の野口義麿氏による余山貝塚関連資料の一括寄贈を皮切りに、平成元年（1989）の小野良弘氏による千葉県を中心とした攻玉関連遺跡の一括資料の移管、平成2年（1990）には梶島隆氏による東京、神奈川を中心とした遺跡の表一括資料、平成12年（2000）には、財団法人蘇峰会より徳富蘇峰及びその子息による蒐集資料、平成16年（2004）には、静岡県の篤志家、服部和彦氏によって、ご自身が半世紀に亘って蒐集された和鏡や懸仏などの仏教美術約2,000点が寄贈され、平成17年（2005）には、川上名昭氏蒐集の関東地方を中心とした縄文時代の一括資料などが近年では規模の大きい寄贈資料となっている。また、新体制となった平成19年（2007）には、鳥取大学名誉教授吉谷昭彦博士による汎日本的な黒曜石標本資料が、

平成20年には、竹岡俊樹博士によるサヌカイトを素材とする旧石器の一括資料(香川県国分台遺跡出土)が寄贈された。

研究面では、わが国の基層文化の解明を目的とした調査・研究活動を設理想念の一つとし、その研究活動の一環として祭祀遺跡の考古学的解明に取り組むこととなった。昭和60年(1985)岩手県小田遺跡・昭和61年(1986)石川県白山山頂・昭和63年(1988)東京都根島帆縫原遺跡・平成元年山形県河井山遺跡群・平成5年(1993)山形県壇場遺跡・平成6年(1994)北海道弁天島遺跡・平成7年(1995)東京都大島和泉浜遺跡C地点・平成8年富山県尖山祭祀遺跡・平成10年(1998)福井県雄島祭祀遺跡・平成12年広島県吉備津神社境内祭祀遺跡(輪蔵遺跡)・平成15年(2003)静岡県伊豆山神社・平成18年(2006)山形県須部野遺跡、さらに新体制になった平成21年(2009)からは出雲風土記ゆかりの島根県琴引山と継続して調査し、成果を上げている。また、科学研究費などの資金を得て伊豆諸島における鏡信仰解明のため大島・三宅島・利島・八丈小島などでの詳細悉皆調査並びに発掘調査を実施してきた。このような発掘調査などの学術成果については、昭和60年に創刊した『考古学資料館紀要』に研究論文と共に報告を掲載することとし、今日に至っている。また、市民にむけての研究成果の公表という観点から「考古学資料館公開講座」を開催したことも新たな試みであった。

平成10年には、創設70年の節目としてこれまでの木製ローケースを全てスチール製に新調したことによって展示を刷新した。新ケースの原案は当時学芸員であった青木豊博士(現教授)によるもので、機密性を保てることや照明や調湿材についても考慮されており、現在の新資料館においても現状のまま使用している。展示については、やはり時系列の時代別集合展示を踏襲したものであったが、中国鏡、攻玉関連資料や顔料関係など一部テーマ性を持たせたため、従前の展示より公開資料数は少なくなったものの、視覚的には見やすくなった。また、寄贈者別にそれぞれケースを分けた点についても以前とは大きく異なっている。

平成14年には、國學院大學創立120周年を記念して、渋谷東急百貨店において特別展「日本のこころとか

たち」を開催、学外における初の展示企画となった。

伝統文化リサーチセンター資料館考古学部門

リニューアルの経緯

冒頭に述べたように平成19年、國學院大學では渋谷再開発の一環として設立したアカデミック・メディアセンター棟(以下AMC)に研究開発推進機構を設け、その組織内に考古学資料館、神道資料館、日本文化研究所をはじめとした従来の研究組織を統合した。同年より「私立大学学術研究高度化推進事業」「オープン・リサーチ・センター整備事業」事業名「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」に着手し、その成果公開の場としての施設の位置付けがなされた。考古学部門では、「祭祀遺跡に見るモノと心」を研究テーマに事業を推進することとなった。これに伴い平成19年考古学資料館は、伝統文化リサーチセンター資料館の考古学部門となり学内組織的には学術資料館考古学部門として研究開発推進機構の傘下に入り、これまでの体制から大きく改変することとなったのである。法的措置として、平成20年7月には東京都教育委員会に「博物館相当施設指定事項等の変更手続き」を提出し、博物館相当施設としての正式名称を「伝統文化リサーチセンター資料館」と改変したのである。

一連の事業計画に先立って従来の考古学資料館運営委員会では、平成18年の段階で、当時の館長小林達雄博士(名誉教授)による「常磐松メディアセンター棟に設置される新考古学資料館にかかる要望」など大学当局に幾多の改革案を申し入れたことによって、施設面での大半が認められた結果となっている。当時の要望書の内容は、以下のとおりである。

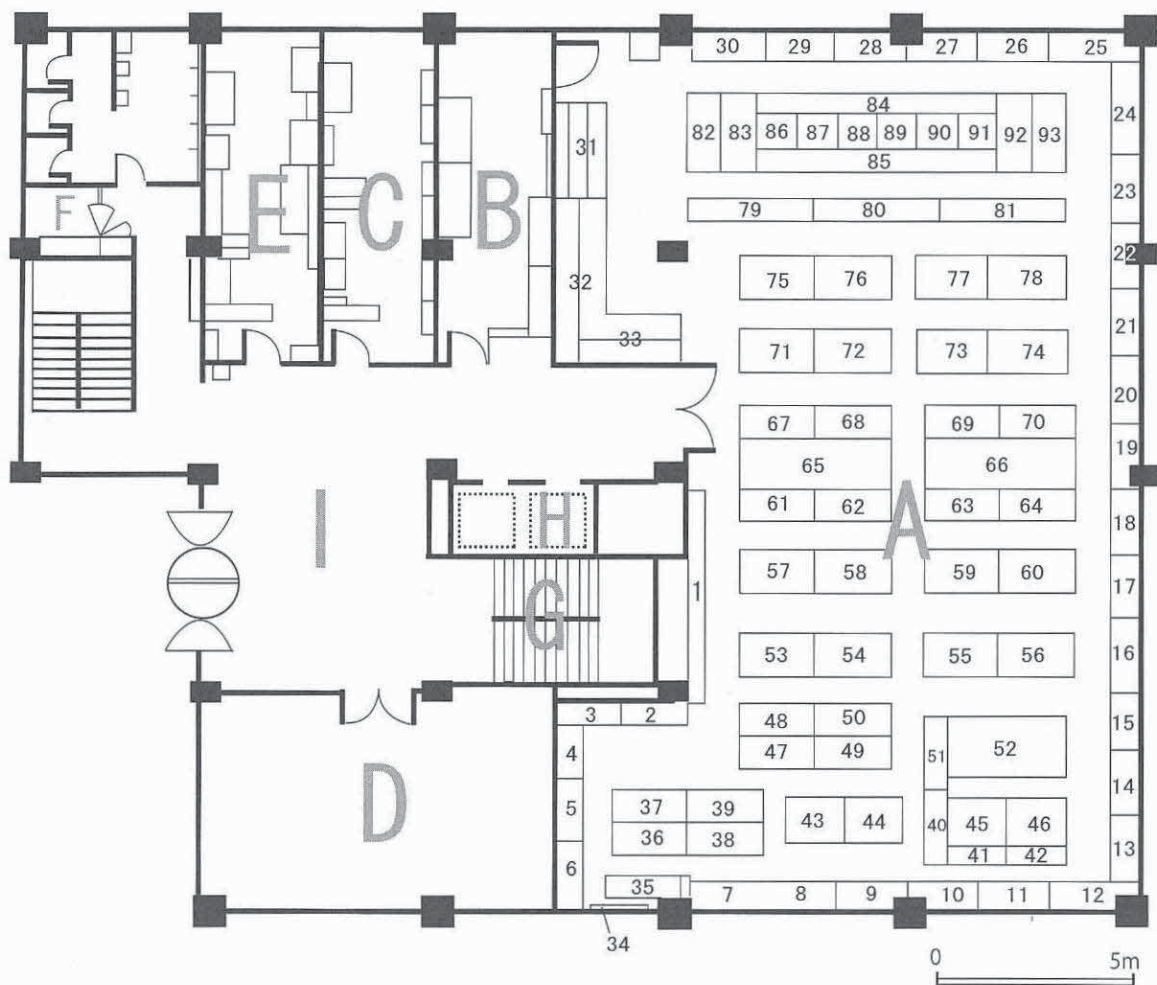
「常磐松メディアセンター棟に設置される新考古学資料館にかかる要望」

●組織形態

館長(1名)・運営委員(3名)・学芸員1名(本来は2名14年度退職者の補充を欠く)・事務職員(1名)・臨時雇員の現状組織で運営する。学芸員は、館務の円滑な遂行のため2名体制の復帰を切に希望するものである。

●新博物館の在り方について

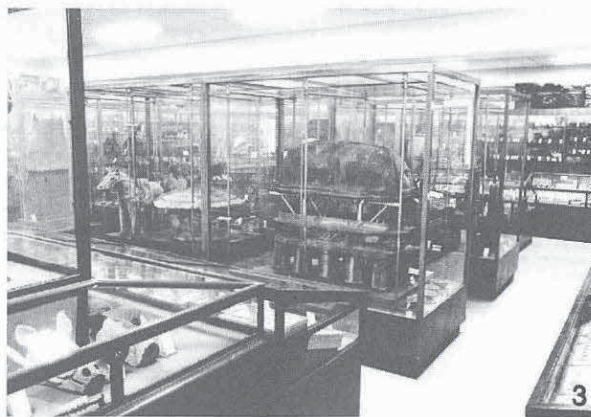
博物館施設としての要件は、一般の建物ではなく博物館として以下にあげるような展示・収



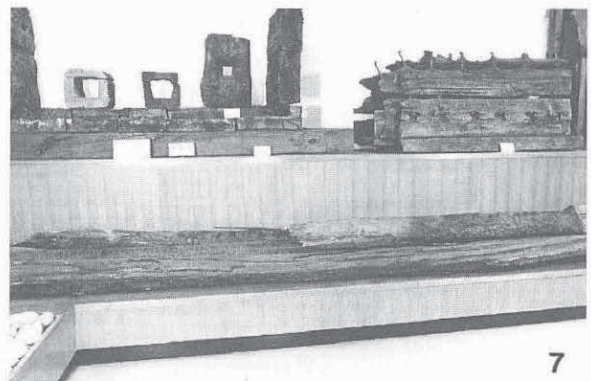
- A 考古学資料展示室
- B 考古学資料館研究室
- C 考古学第1研究室
- D 考古学第2研究室
- E 博物館学研究室
- F 湯沸室
- G 階段
- H エレベーター
- I ロビー
- 1・2 旧石器文化・石器等
- 3～9 縄文文化・土器
- 10～13 弥生文化・土器・石器・金属器等
- 14～19 古墳文化・土師器・須恵器等
- 20～22 神奈川県小田原市下曾我遺跡出土品
- 23～30 歴史時代・古瓦・骨蔵器・仏教関係資料
- 31～33 歴史時代・板碑・五輪塔・江戸水道管・下曾我遺跡出土木柱等
- 34 堀之内貝塚断面標本
- 35 縄文文化・埋葬標本
- 36～42 縄文文化・装身具・石器等
- 43～46 九州各地出土甕棺

- 47～51 縄文文化・骨格器・食糧標本・石器・石器製作資料等
- 52 縄文文化・石囲炉・埋葬遺構復元資料・竈復元資料
- 53～68 古墳文化・埴輪・陶棺・須恵器・玉類・玉類製作資料・鏡・武器・武具・石鍋製作資料
- 69・70 歴史時代・祭祀遺物
- 71・72 古墳文化・埴輪・常陸鏡塚出土品等
- 73 中国出土・土器・石器・金属器等
- 74 中国・朝鮮・南米出土品
- 75～93 歴史時代・陶磁器・古窯出土陶磁器・製作資料

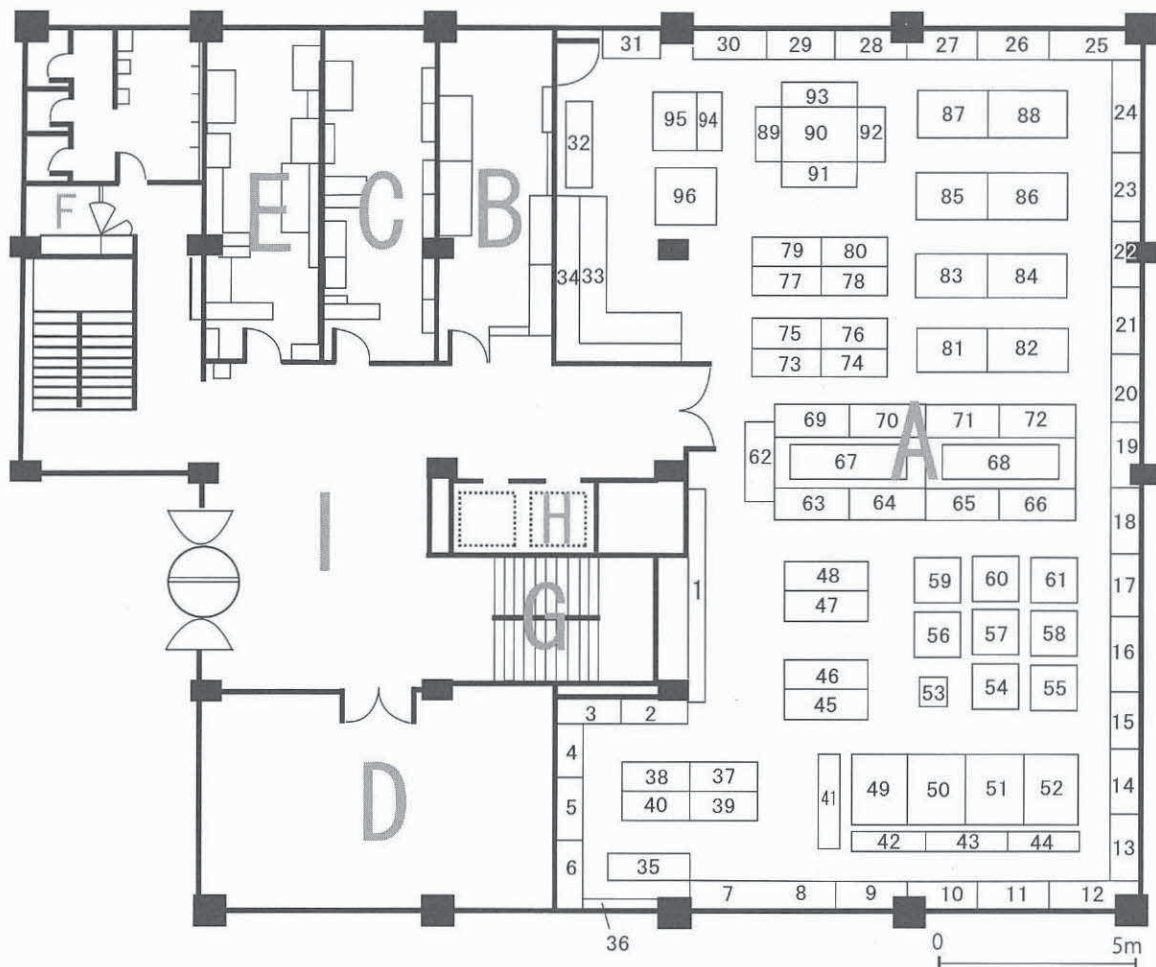
考古学資料館時代（1968～1997）の展示室平面図と展示資料（常磐松2号館1階）



- 1 縄文土器
- 2 人物埴輪
- 3 陶棺・器財埴輪
- 4 古瓦
- 5 和鏡・経塚遺物
- 6 中世陶器・近世陶片
- 7 水道管（江戸時代）

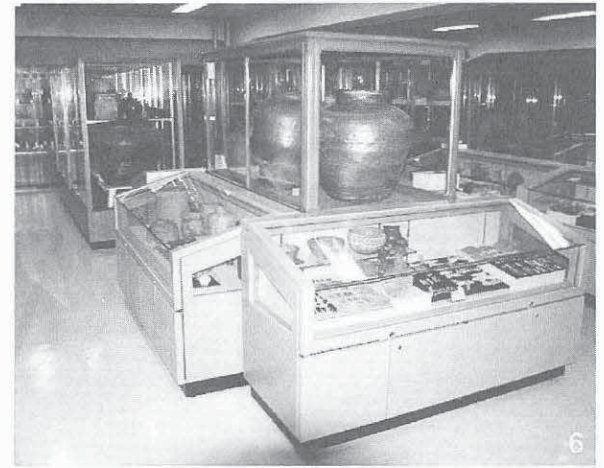
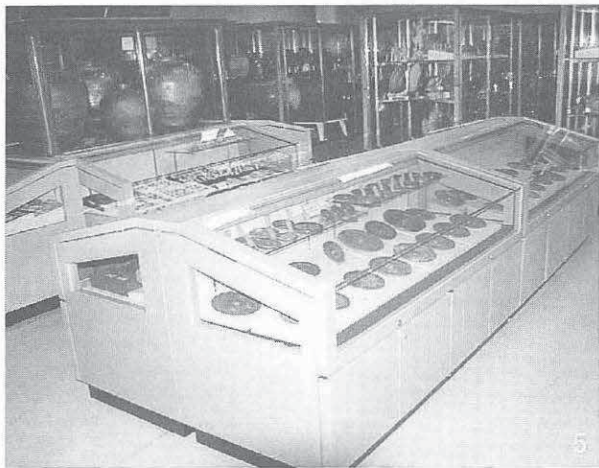
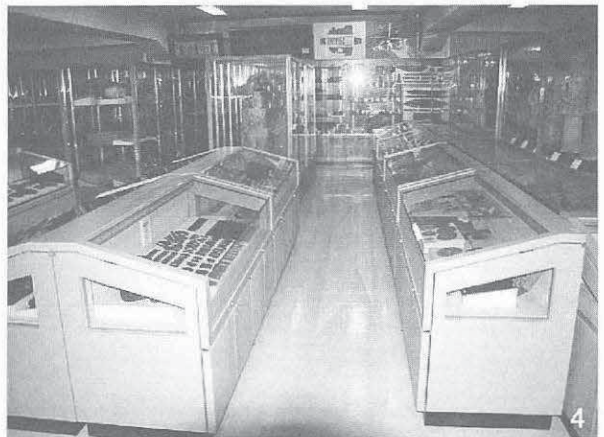
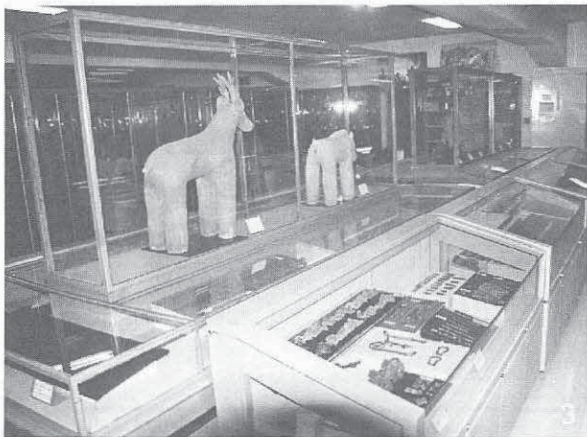
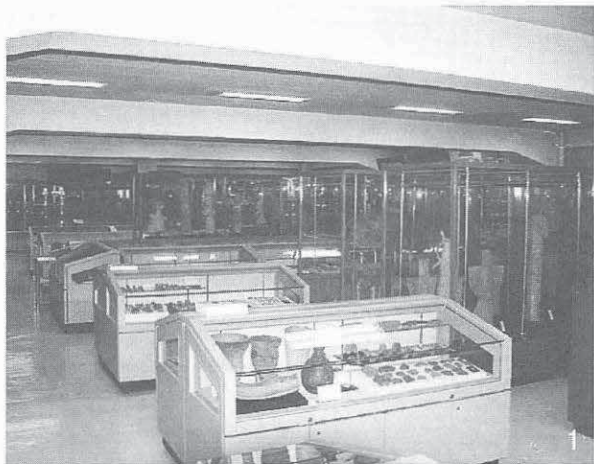


考古学資料館時代（1968～1997）の展示室



A	考古学資料展示室	22	神奈川県小田原市下	55	実験考古学資料	91	中国・朝鮮半島関連資料
B	考古学資料館研究室		曾我遺跡出土・土師	56・57	古墳時代・埴輪	92	古代文字資料・墨書土器
C	考古学第1研究室		器・須恵器等	58	古墳時代・須恵器		木簡
D	考古学第2研究室	23~25	古瓦	59	古墳時代・陶棺	93	経塚関連資料
E	博物館学研究室	26・27	蔵骨器	60・61	古墳時代・埴輪	94	東南アジア関連資料
F	湯沸室	28	蔵骨器・仏教関連資料	62	広形銅鉢・拳手人面土器	95	銅鼓
G	階段	29・30	仏教関連資料		石枕（重要文化財）	96	アジアの民具
H	エレベーター	31	板碑	63	古墳時代・装身具		
I	ロビー	32	早野横穴線刻画（複製）	64	茨城県常陸鏡塚古墳出土		
1	人類学資料・旧石器時代	33	江戸時代・水道管		資料		
	・石器等・縄文時代土器	34	五輪塔	65	古墳時代・装身具・武器		
	早期～前期	35	縄文時代埋葬人骨	66	弥生時代・関連資料		
2	縄文時代土器・前期	36	堀之内貝塚断面標本	67	古墳時代・人物埴輪・石		
3・4	縄文時代土器・前期	37	旧石器時代・石器		製模造品		
	（花鳥山遺跡）		（小坂遺跡）	68	古墳時代・動物埴輪・鏡類		
5・6	縄文時代土器・中期	38	縄文時代・草創期	69	古墳時代・鏡類		
7	縄文時代土器・後期		（壬遺跡）	70	古代・中世・和鏡		
8・9	縄文時代土器・晩期	39	縄文時代・草創期	71・72	古墳時代・武器・工具		
10・11	弥生時代土器・石器		（石小屋洞窟遺跡・西谷	73	古墳時代・衝角付冑・挂甲		
12	古墳時代・土師器		遺跡・水久保遺跡）	74	古墳時代・祭祀遺物		
13	弥生時代土器・石器	40	縄文時代・装身具	75	和泉浜遺跡C地点関連資料		
14	古墳時代・土師器	41	縄文時代・土偶・土製品	76	鳥打・宇津木遺跡関連資料		
15	古墳時代・土師器	42	縄文時代・石棒・石冠	77・78	中国鏡		
16	古墳時代・平安時代	43	縄文時代・土錘・石錘・	79	攻玉関連資料		
	製塩資料		骨格器等	80	原始・古代の顔料		
17	古墳時代・土師器	44	縄文時代・石斧・石鏃・	81・82	古墳時代・埴輪		
18	古墳時代・飛鳥・奈		石皿	83	中国・朝鮮半島関連資料		
	良時代・須恵器	45・46	野口義麿コレクション	84	古墳時代・埴輪		
19	古墳時代～平安時代	47	小野良弘コレクション	85・86	中国・朝鮮半島関連資料		
20	神奈川県小田原市下	48	花鳥山コレクション	87	陶磁器（日本）		
	曾我遺跡出土木製品	49~52	弥生時代・甕棺	88	徳富蘇峰コレクション		
21	神奈川県小田原市下	53	弥生時代・銅鐸	89	北米・中米関連資料		
	曾我遺跡出土木製品	54	古墳時代・土師器	90	中世古窯資料		
	・石器等						

考古学資料館時代（1995～2006）の展示室平面図と展示資料（常磐松2号館1階）



- 1 旧石器・縄文土器
- 2 古墳時代 人物埴輪
- 3 古墳時代 装身具・動物埴輪
- 4 古瓦
- 5 中国鏡
- 6 中世陶器・外国史料

考古学資料館時代（1995～2006）の展示室

蔵・整理・研究室・館長室・事務室等の必要面積および充分安全性と使い勝手の良さが保証されなければならない。つまり、スペースの確保だけでは博物館として将来様々な弊害が発生することが予想されるため、十分に熟考された建築設計が望まれ、80年に亘って蓄積された貴重な大学の財産を保管する施設であることを再認識する必要がある。

さらに歴史の古い考古学並びに博物館学課程では全国に多くの院友学芸員を輩出しており、また多くの考古学・博物館学講座を擁する大学の範と成すべき施設であるといった対外的な必要性もある。

このような観点から鑑みれば考古学資料館は、独立した博物館施設として厳存すべきである。施設のポイント

① 考古学資料館として独立したスペースの確保。

② 各セクションの機能が連動していること。

展示室・収蔵庫・研究室などへの行き来が円滑であること。外からの搬入や車両の近接がスムーズに行えること。頻繁な貸出業務に対応可能なものでなければならない。

③ セキュリティ

地震などの自然的災害による収蔵品の倒壊や損傷は、先の阪神淡路大震災による博物館被害を見れば理解できるように、新設の博物館施設には特に重要な資料については免震装置を完備した展示ケースの配備が必要であろう。また、火災などの人的災害では職員はもとより特に見学者の安全性の確保に充分に安全性が確保されることを希望する。盗難や環境因子による劣化などにも配慮が必要であることは言うまでもない。

A. 展示室

① 常設展示室 1F

常設展示室は、常設展示と収蔵展示を併存させる二次元配列（Dual Arrangement）が望ましい。現状の展示は、収蔵展示が主体となっており、一般来館者には難しいものとなっている。大学の看板施設として、より社会に向けた公共性を配慮するなら説示的な展示も必要である。

このような形態をとる博物館は、海外の先進的な大学博物館に多く、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館（Museum of Anthropology at UBC）などは好例である。

② 特別展示室の新設（大学共同利用施設）

常設展示スペース以外に、特別展示室の設置を強く要望する。考古学資料館を例に挙げれば、現状では、博物館活動の一環として特別展示や企画展示といった常設展示以外のテーマに応じた特別公開などの機能空間はない。学術情報の社会還元の見点からみても時代に沿ったものではなく将来展望としては、考古学に限らず神道・校史・図書などの分野別特別展示を実施でき、さらに学内の諸研究機関収蔵資料の展示（先の折口博士関係の展示などは好例）などが多角的に実践できる。多彩な企画展示は、集客力をもって大学の存在性を強く社会にアピールできる。

また、院友、教職員、関係者の貸しギャラリーとしても多用途に使用できるスペースとして活用できる。さらに、博物館学芸員課程の実習展示の場を積極的に設ける必要があり、博物館学芸員課程にとっても必要不可欠な施設であることは言うまでもない。

共同利用の可能性のある部所等

○図書館・各文庫 ○校史資料室 ○神道資料館 ○日本文化研究所 ○折口博士記念古代研究所 ○武田博士記念室 ○河野省造博士記念室 ○総合学習事業課 ○万葉花の会 ○書道・華道団体など多方面に及ぶ

●常設展示室・特別展示室の位置

人の出入り資料の搬出入を考えれば、1階への設置がのぞましい。

●安全性の確保

動線・照明・色彩計画・展示器具などが充分に考慮され、さらに重要文化財を含む貴重資料の安全性の確保が優先されなければならない。つまり、博物館施設として防犯・防災対策が講じられた最低限の諸条件を充たすものでなければならない。

B. 収蔵庫 地階

将来的な資料の増加（現総収蔵点数 89,130点）を考えれば、収蔵庫のさらなる確保が必要

である。収蔵庫は収蔵環境が整い防犯対策の講じられたものでなければならない。搬入出経路が円滑であり、展示室・研究室など各セッションとのアクセスがスムーズにおこなえる位置設定を希望する。

特に外部から資料を搬出入する場合のトラックヤードの確保、トラックヤードから収蔵庫、展示室などに搬入する際のリフト・エレベータの設置なども必要であろう。

C. 整理室・保存処理室

学術調査の誠意や収蔵資料の修復など多目的に使用できる施設が必要であり、水道、換気などの設備が整ったものでなければならない。

また、遺物の保存処理にかかる装置を設置、実作業にあたるための保存処理室の併設を望む。既存の機器だけでも相応の設置スペースが必要。現在既存の資料整理室、実習室として考古学実習室・博物館学実習室があるが、それぞれなくてはならないスペースであるが、本館の資料整理室と共有する部分ではない。

D. 写 場

資料の撮影には不可欠な施設。

E. 研究室

学芸員2名の研究室

F. 事務室

事務職員の執務室

G. 館長室

会議・大学への来客の接待場所等多目的に使用。

現状の組織形態については、専任教員として研究開発推進機構員に統括され、担当者として考古学部門に3名（准教授1名・講師1名・助教1名）が配置され、館長、運営委員の配置は従来のままとなり、事務職員の配置については、研究開発推進機構事務課に統合されることとなった。

リニューアル後の施設については、展示室は約700㎡（全体1614㎡）と従来の約2倍の面積が確保され、展示そのもののコンセプトについては、平成19年5月より展示構想策定委員会（考古資料館運営委員）を組織し、その構成内容について審議を重ねたが、構想と現実的な予算面での折り合いに大きな

齟齬をきたす結果となったことにより、二元的配列や博物館学展示は適わず、創設以来踏襲してきた展示コンセプトに、ORCの研究テーマである「祭祀遺跡にみるモノと心」をかぶせる内容となった。

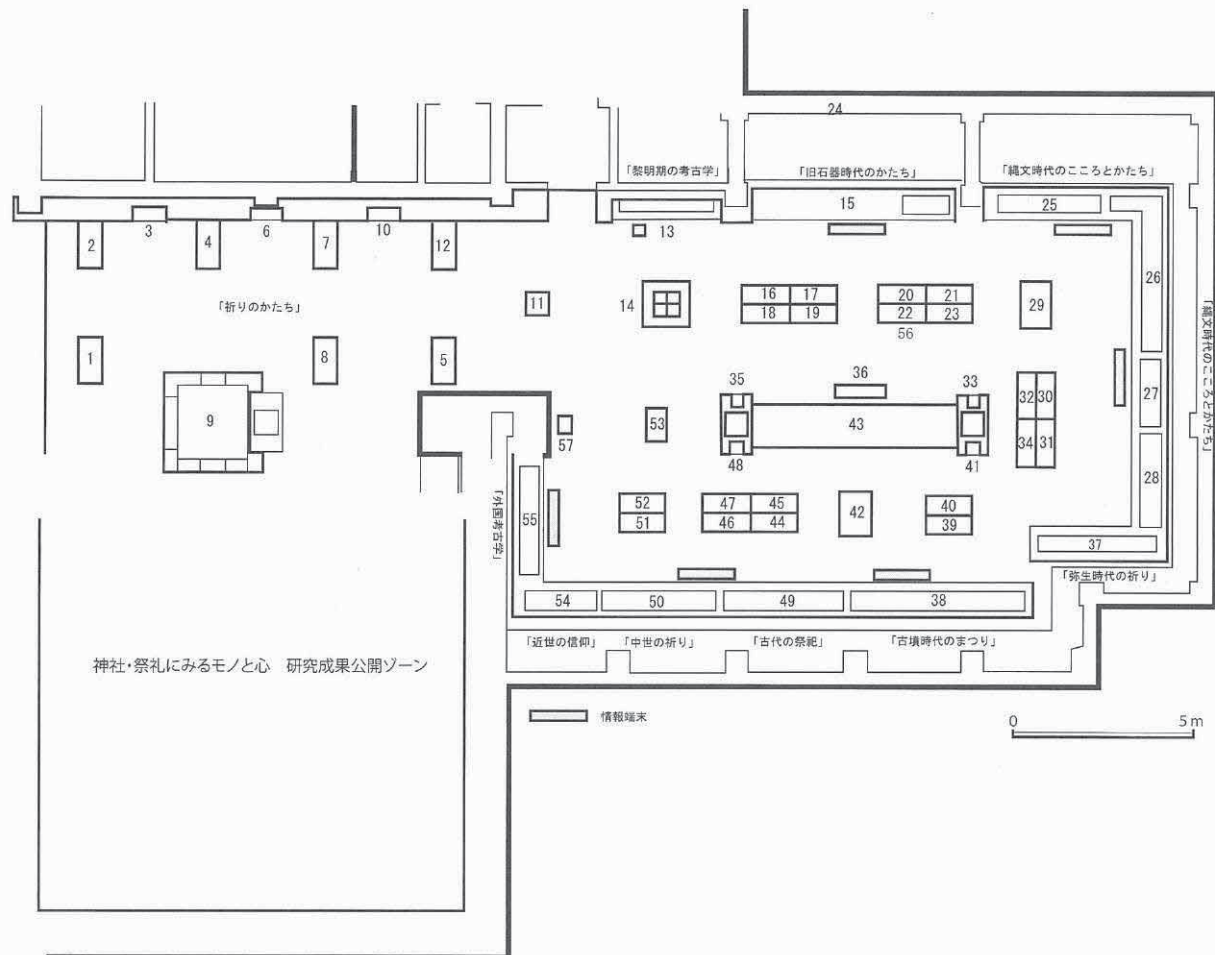
要望書にある特別展示室については「企画展示室」として設置され、各グループが「研究成果公開の場」として活用している。施設内の防火・防犯対策についても建築計画段階から十分に所管の消防署等と協議し安全対策をこうじており十分なものとなっている。収蔵庫は、279.3㎡と広い面積を確保、保存処理施設として、鉄器処理施設、PEG含浸槽を完備、撮影室ではデジタル撮影に対応した写場が設置されたのである。

このように、ほぼ要望通りの施設拡充が適った背景には、大学当局の理解はもとより、重要文化財公開承認施設を目指して計画当初の平成18年から文化庁より管財課と共に施設についての十分な指導を受けていたことが大きい。具体的な保存環境調査については平成20年春より実施、東京文化財研究所保存修復センター長の石崎武志博士の懇親の指導によって展示環境が整ったことにより、10月に実施した特別展「まつりの具え」に2件の重要文化財の展示が適ったのである。

「祭祀遺跡に見るモノと心」研究グループの研究公開事業と伝統文化リサーチセンター資料館の活用

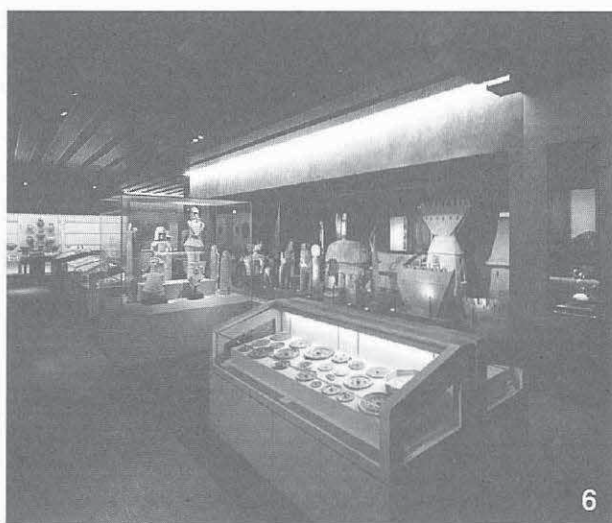
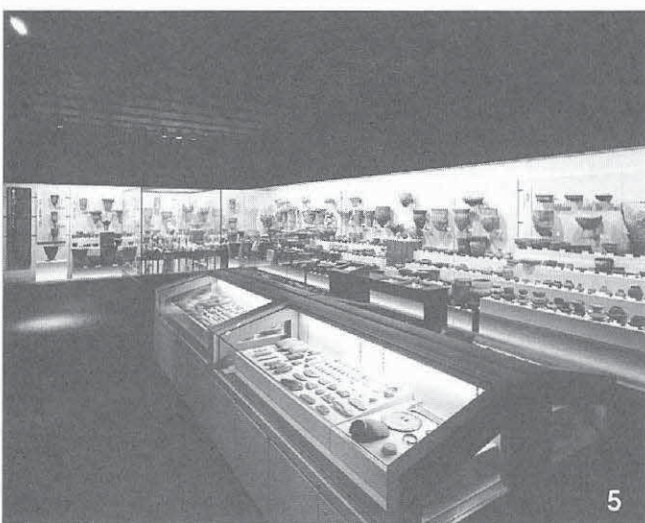
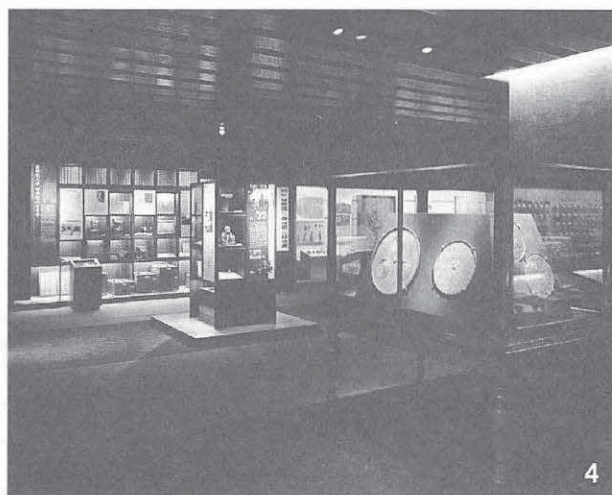
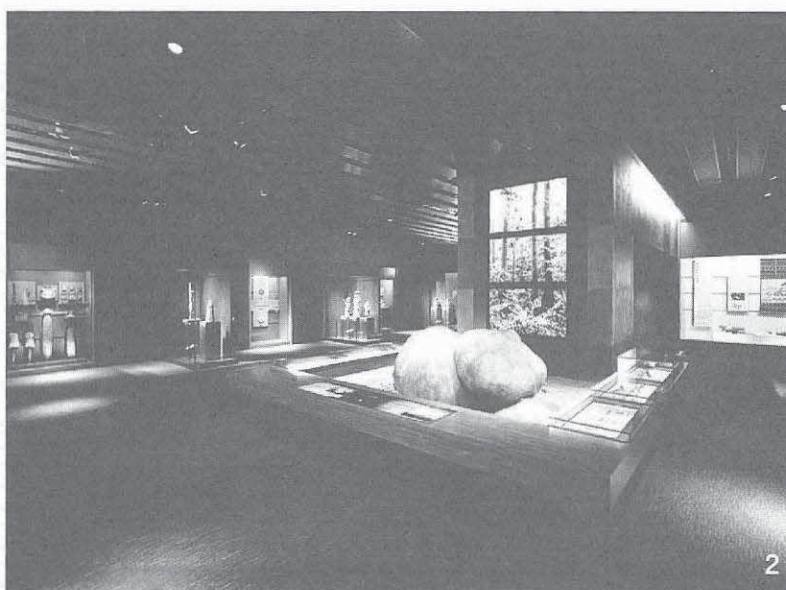
本研究グループは、北東北を中心とした縄文時代の祭祀遺跡研究、研究の歴史の長い伊豆半島・諸島の古墳時代から中近世にいたる研究、さらに出雲地域の古墳時代を中心としたグループに分かれ研究を推進している。伝統文化リサーチセンター資料館は、それぞれのグループでおこなう研究成果を広く社会に示す場としてその位置付けがなされており、その活用の現状について報告する。

導入ゾーンのテーマは「祈りのかたち」とし、本館に所蔵する祭祀関連資料のうち、資料価値の高いものを時期別にハイケース8台の中に収め公開している。また、神道部門との連携展示として奈良県山ノ神遺跡の映像を併設した構造展示を展開し、その周りには福島県建鉾山遺跡、静岡県洗田遺跡等の祭祀遺物を公開する。さらに奥に進んだゾーンでは、昭和3年の創設時より踏襲している時系列に沿った



- | | | |
|-----------------|---------------------|------------------|
| 1 火焰土器（神林修氏寄託） | 22・23 縄文時代草創期 | 51 仏教美術 懸仏類 |
| 2 縄文時代後・晩期 土偶 | 24 縄文時代草創期 | 密教法具類 |
| 3 縄文時代中期～晩期 | 25 縄文時代早・前期土器群 | （服部和彦氏寄贈） |
| 石棒・石剣・石皿・土版 | 26 縄文時代中期土器群 | 52 和鏡類（服部和彦氏寄贈） |
| ・岩版 | 27 縄文時代後期土器群 | 53 柄鏡類（服部和彦氏寄贈） |
| 4 弥生時代 青銅器 | 28 縄文時代晩期土器群 | 54 近世宗教遺物 |
| 銅鐸・銅鉦 | 29 縄文時代 第2の道具 | 55 外国資料 中国・韓国・タイ |
| 5 弥生時代中期 長頸壺 | 30 縄文時代 骨格器 | 56 土層剥取標本 千葉県松戸市 |
| 6 弥生～古墳時代 | 31 縄文時代 装身具類 | 57 樋口清之博士胸像 |
| 三種の神器 | 32 縄文時代 石器類 | |
| 7 古墳時代 人物埴輪 | 33 縄文土器 ミニチュア | |
| 8 拳手人面土器他 | 34 弥生時代遺物各種 | |
| 9 山ノ神遺跡 岩坐復元 | 35 世界の石器 | |
| 建鉾山遺跡・洗田遺跡出 | 36 黒曜石アトラス | |
| 土資料 | （吉谷昭彦博士寄贈） | |
| 10 和泉浜遺跡C地点出土資料 | 37 弥生時代 土器群 | |
| 11 石枕（重要文化財） | 38 古墳時代 土師器・須恵器の変遷 | |
| 12 平安時代 蔵骨器 | 39 古墳時代 鏡鑑類 日本 中国 | |
| 13 國學院大學の考古学史関 | 40 古墳時代 武器・武具 | |
| 連資料 | 41 古墳時代 祭祀遺物 建鉾山遺跡 | |
| 14 樋口清之博士関連資料 | 42 古墳時代 形象・器財埴輪 | |
| 15 旧石器時代 | 43 古墳時代 埴輪群像 | |
| 美利香遺跡・柳又遺跡他 | 44 古墳時代 常陸鏡塚古墳 出土資料 | |
| 16 旧石器時代 | 姉崎二子塚古墳 出土資料 | |
| 香川県国分台遺跡出土資 | 45 古墳時代 装身具 攻玉関連資料 | |
| 料（竹岡俊樹博士寄贈） | 46 古墳時代 祭祀遺物 | |
| 17・18 旧石器時代資料 | 47 古墳時代 三角縁三神三獣鏡 | |
| 北海道他各地 | 48 歴史時代 祭祀関連資料 | |
| 19 旧石器時代～縄文時代 | 49 木製模造品 兵庫県豊岡市袴狭遺跡 | |
| 泉福寺洞窟出土資料 | 兵庫県立考古博物館寄託資料他 | |
| 佐世保市教育委員会寄託 | 50 中世 石製塔婆類 蔵骨器他 | |
| 20・21 旧石器時代 | | |
| 柳又遺跡出土資料 | | |

伝統文化リサーチセンター（2007～）考古学部門の展示室平面図と展示資料 「祭祀遺跡に見るモノと心」



- 1 祈りのかたち
- 2 山ノ神遺跡（神道部門との共通ゾーン）
- 3 入り口見た展示ゾーン
- 4 黎明期の考古学
- 5 縄文時代コーナー
- 6 古墳時代コーナー

伝統文化リサーチセンター資料館 考古学部門「祭祀遺跡に見るモノと心」展示室

KOKUGAKUIN UNIVERSITY

まつり
そなえ

開館期間
11月2日(月)～12月12日(土)

御食たてまつるもの

伝統文化リサーチセンター資料館
公開講座
「そなえを問う」
11月7日(土)21日(土)12月12日(土)

国学院大学

国学院大学渋谷キャンパス再開発完成記念事業企画プロジェクト
TEL:03-6440-3440 営業時間:9時～19時 TEL:03-6440-3111 <http://www.kokugakuin.ac.jp>

共催 国学院大学学術資料館

企画展
いにしへの渋谷
～遺物から探る歴史の一面～

会期
平成21年
10月3日(土)から
平成22年
1月11日(祝・月)まで

開館時間 9:00～17:00 (入館は16:30まで)

白根記念
渋谷区郷土博物館・文学館
SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHRINE MEMORIAL MUSEUM
(渋谷区白根3-1-1 旧渋谷区立白根小学校校舎)

所在地 〒150-0011渋谷区東四丁目9-1
電話 03-3486-2791
FAX 03-3486-2793
交通 渋谷駅から
徒歩 徒歩 日赤医療センター前行(学03)
国学院大学前下車徒歩2分
ハチ公バス 郷土博物館・文学館下車すぐ
入館料 一般100円(80円) 小中学生50円(40円)
()は10名以上の団体料金
*60歳以上の人、障害のある人と付き添いの人は無料

国学院大学 伝統文化リサーチセンター資料館 企画展

国学院大学 伝統文化リサーチセンター資料館 企画展

伊豆半島・諸島における
神社の成立と展開

祭祀考古学研究所と校史資料館の現場から

〇ギャラリートーク&セッション
《伊豆の祭祀遺跡と神・仏》
日時 平成22年6月23日(水) 19時～19時半
会場 本学伝統文化リサーチセンター資料館 展示室(特別会場)
パネリスト
中村耕作(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
佐藤 健(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
内川 隆志(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
司会 浅澤 太郎(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)

会場 国学院大学 伝統文化リサーチセンター資料館 (地下1階)
会期 平成22年5月16日(日)～7月10日(土)
開館時間 10時～17時 (入館は16時30分まで)
休館日 日曜日・祝日
※なお、大学行事等の都合により、開館に際し、休館する場合があります。

主な展示品
大塚資料館出土資料(本学蔵)・熱河県下田町遺跡出土資料(神奈川)
静岡県静岡市上野宮古墳出土資料(熱海市教育委員会蔵)
平塚市東野村二子塚古墳出土資料(本学蔵)
高野町大塚資料館出土資料(高野町教育委員会蔵)
東京都利根川町長谷古墳出土資料(利根川町教育委員会蔵)
東京都八王子市八王子町出土資料(八王子市教育委員会蔵)

国学院大学 伝統文化リサーチセンター資料館 企画展

伊豆半島・諸島における
神社の成立と展開

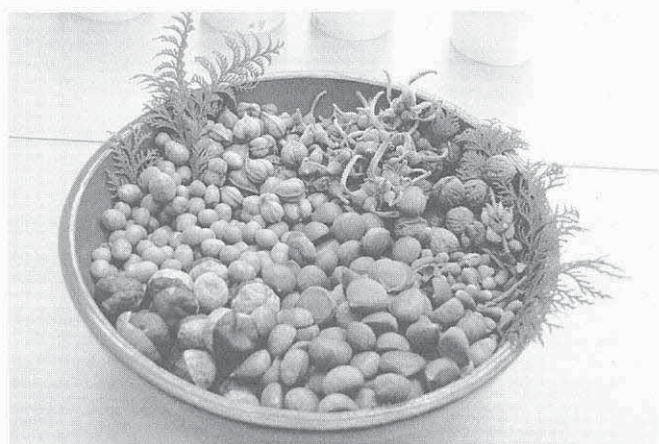
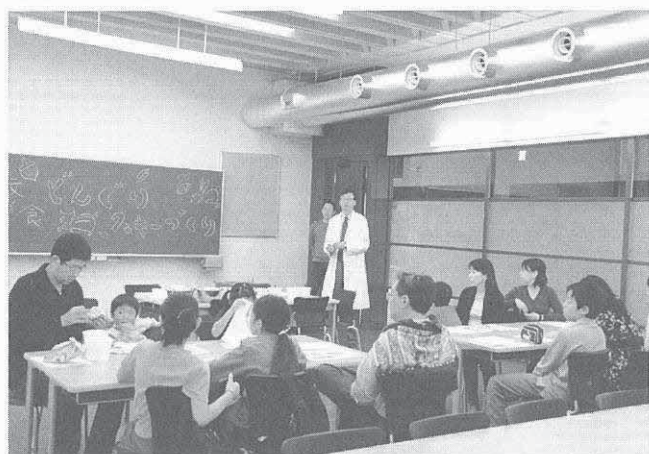
祭祀考古学研究所と校史資料館の現場から

〇ギャラリートーク&セッション
《伊豆の祭祀遺跡と神・仏》
日時 平成22年6月23日(水) 19時～19時半
会場 本学伝統文化リサーチセンター資料館 展示室(特別会場)
パネリスト
中村耕作(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
佐藤 健(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
内川 隆志(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)
司会 浅澤 太郎(国学院大学・大塚資料と国学院の考古学)

会場 国学院大学 伝統文化リサーチセンター資料館 (地下1階)
会期 平成22年5月16日(日)～7月10日(土)
開館時間 10時～17時 (入館は16時30分まで)
休館日 日曜日・祝日
※なお、大学行事等の都合により、開館に際し、休館する場合があります。

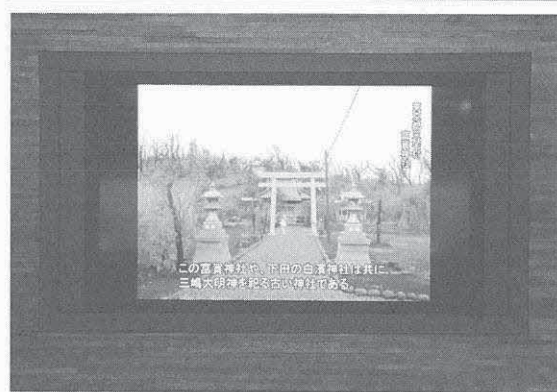
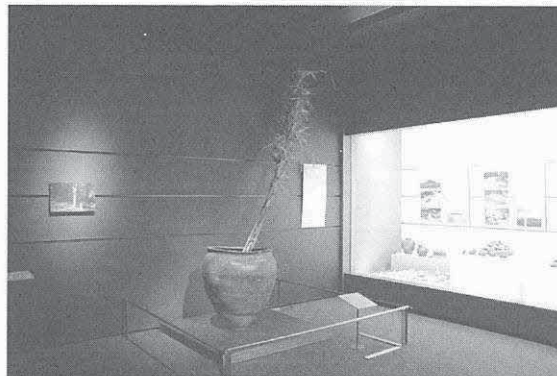
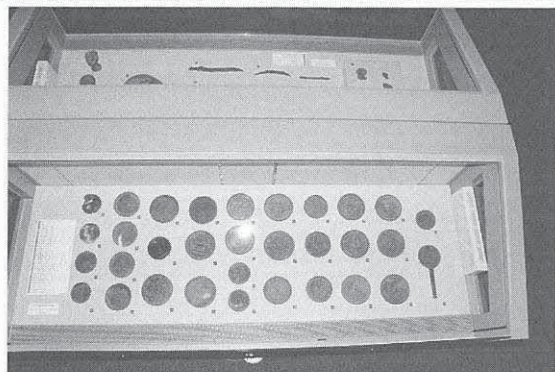
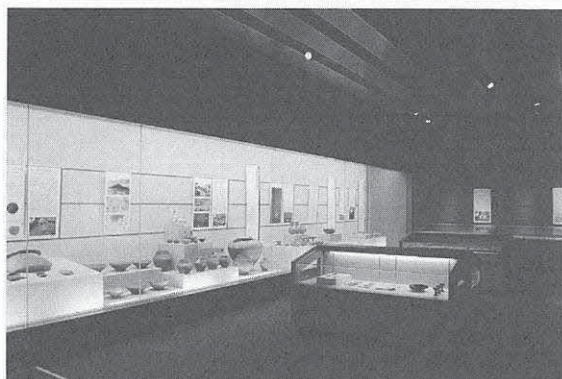
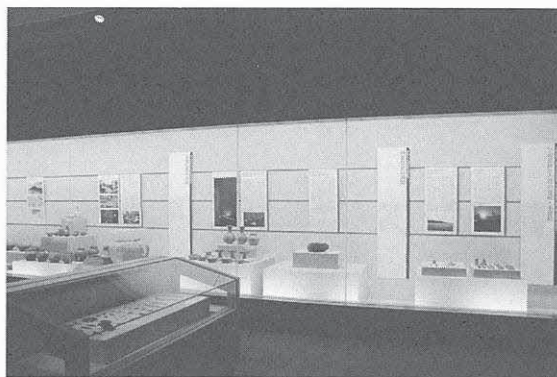
主な展示品
大塚資料館出土資料(本学蔵)・熱河県下田町遺跡出土資料(神奈川)
静岡県静岡市上野宮古墳出土資料(熱海市教育委員会蔵)
平塚市東野村二子塚古墳出土資料(本学蔵)
高野町大塚資料館出土資料(高野町教育委員会蔵)
東京都利根川町長谷古墳出土資料(利根川町教育委員会蔵)
東京都八王子市八王子町出土資料(八王子市教育委員会蔵)

特別展示・企画展示のポスター

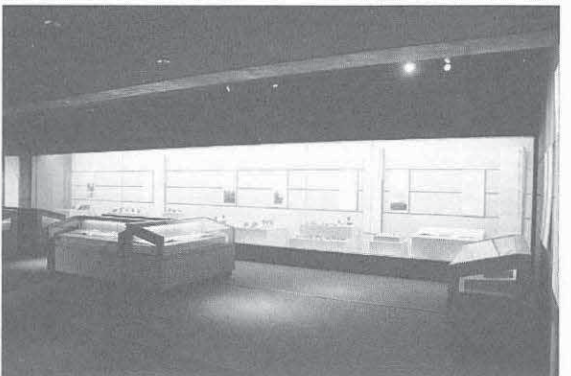
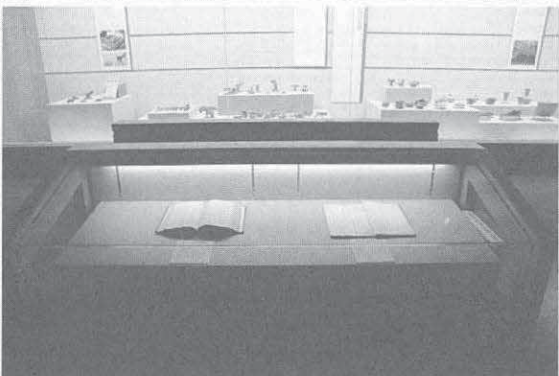
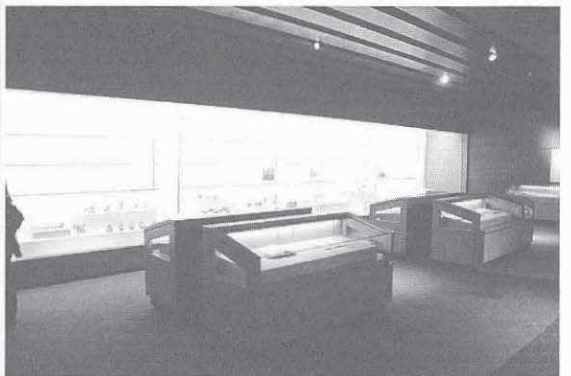
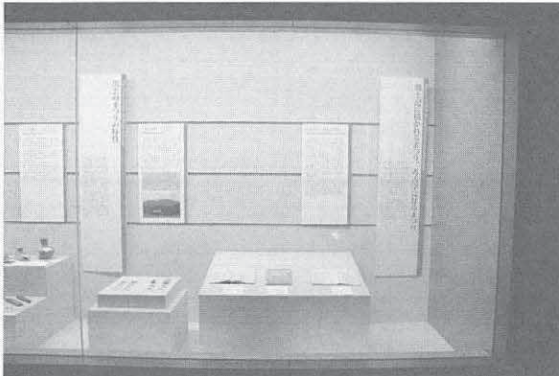
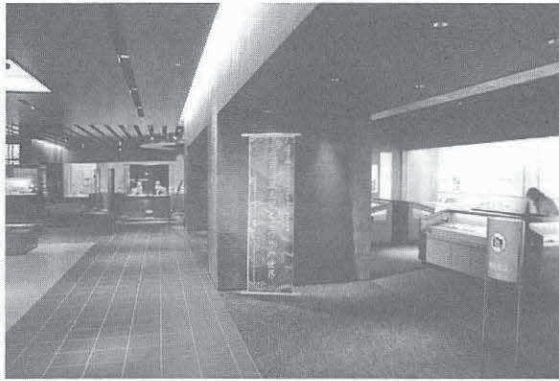


小学生のための考古学ワークショップ
渋谷区教育委員会と共催

2009年10月 4回実施
縄文アクセサリー作り
縄文クッキー作り他
2010年8月 2回実施
勾玉製作



企画展示 「伊豆半島・伊豆諸島における神社の成立と展開」 2010年5月10日～7月10日
 トークイベント 「伊豆の祭祀遺跡と神・仏」 2010年6月23日



企画展示 「出雲風土記とまつりの世界」 2010年10月2日～11 月27日
展示風景とギャラリートーク

開催年	特別展・企画展名	期間	内容
平成19年	研究会「古代三輪山の祭祀と神祇信仰」	平成19年12月1・2日	祭祀考古学会・神道宗教学会共催 伝統文化リサーチセンターでは、資料館に山ノ神遺跡の復元模型や遺物を展示する計画を進めている。そこで今回は、神道宗教学会と祭祀考古学会が共催して、三輪山をめぐる祭祀遺跡・遺物に関する問題点や最新の研究成果について、考古学、歴史学、神道学などの第一線の研究者をお招きし、多角的に検討する。 講演者・発表者（敬称略） （講師） 石野博信（徳島文理大学） 藤森 肇（国士舘大学） （発表者（発表順）） 篠原 祐一（栃木県立しもつけ風土記の丘資料館） 橋本 裕行（奈良県立橿原考古学研究所） 山田 浩之（大神神社） 内田 律雄（島根県立埋蔵文化財センター） 杉山 林継（センター長、教授）
	フォーラム「祭祀遺跡に見るモノと心」	平成20年2月29日	本研究の平成19年度の研究活動と成果の報告を行なう。それとともに各研究に関連する研究者を招聘し、意見の交換を行ない、今後の研究の進展を図る。発表者（発表順） 内川 隆志（准教授） 中村 大（客員研究員） 加藤 元康（ポスドク研究員） 田中 大輔（ポスドク研究員） 新原 佑典（リサーチアシスタント） 阿部 昭典（津南町教育委員会・調査員） 小林 青樹（國學院栃木短期大学・准教授） 高 慶秀（外国人研究員） 小川 直之（文学部・教授） 小林 達雄（文学部・教授） 杉山 林継（センター長、教授） 【コメンテーター】 川口 潤（青森県教育庁文化財保護課・文化財保護主幹） 栗木 崇（熱海市教育委員会・主任学芸員） 錦田 剛志（島根県立古代出雲歴史博物館・専門学芸員）
平成20年	公開講座	平成20年10月4日	発表内容 杉山林継（教授）「出雲という世界」 加藤里美（講師）「祭祀遺跡・遺物から古代出雲のまわりを考える」
	フォーラム「伊豆の神仏と國學院の考古学」	平成20年10月25日	1. 開催主旨 國學院大學の考古学研究室・考古学資料館では、伊豆半島および伊豆諸島の考古学的調査を長年に亘り行ってきた。今回のフォーラムでは、これらの本学考古学の成果を一堂に集め、本地域を拠点に研究活動を行なっている研究者の方々をお招きして、それらを総合的に検討することで、伊豆半島および伊豆諸島における國學院大學の研究視点を再確認し、本プロジェクトの研究活動の位置付けを図るために開催した。 2. 日時 平成20（2008）年10月25日（土） 12時30分～17時15分 3. 場所 本学渋谷キャンパス学術メディアセンター棟1階常磐松ホール 4. 発表者（発表順） 吉田 恵二（教授） 中村 耕作（リサーチアシスタント） 朝倉 一貴・中島 大輔（本学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期） 田中 大輔（ポスドク研究員） 深澤 太郎（助手） 内川 隆志（准教授） 栗木 崇（熱海市教育委員会、本センター・共同研究員） 外岡 龍二（下田市史編纂委員会）
平成21年	企画展「祭祀遺跡・神社祭祀・國學院の学術資産」	平成21年6月1日～7月25日	【展示の概要】 〈「祭祀遺跡に見るモノと心」研究プロジェクト〉 「北東北のマツリと景観」 生活と祭祀の一体性が認められる縄文時代の北東北に注目し、環状列石関係の遺物などから当時の世界観を解明します。 【主な展示】 ・榎の木遺跡（青森県平内市）出土遺物 ・一本松遺跡（青森県平内市）出土遺物 ・本学所蔵の後期前半の土器 ・本学所蔵の後期の土偶 ・縄文ランドスケープ 〈「神社祭祀に見るモノと心」研究プロジェクト〉 「祭祀を彩る動物」 祭祀の折々に登場する動物の役割について、神社本庁の協力のもと実施したアンケート調査に基づき紹介いたします。 【主な展示】 ・絵馬（日光二荒山神社） ・御蔭祭絵図巻 ・古宮神社の獅子頭（埼玉県熊谷市） ・熊野那智瀧宝印 ・東照宮祭礼絵巻 ・八幡馬（青森県八戸市） ・鹿児島神宮の「鯛車」・「香箱（化粧箱）」 ・神狐（東京都台東区） ・ナマハゲ（秋田県） 〈「國學院大學の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクト〉 「ノート・メモから見る近代人文学」 國學院の近代人文学の発展に貢献した研究者のノート類に焦点を絞り、研究業績が生まれる過程を明らかにします。 【主な展示】 ・大場磐雄「子持勾玉をめぐる研究過程」 ・宮地直一「講義ノートとその出版」 ・井上頼寿「メモから著作へ」 ・折口信夫「折口信夫と沖繩探訪のノート」 ・河野省三「聴講ノートから講義ノートへ」

平成21年	特別展「まつりの具え - 御食たてまつるもの - 」	平成21年11月2日～12月12日	○開催のねらい 國學院大學伝統文化リサーチセンターでは、日本の伝統文化を考えるために、神に「供える」こと、とくに食物を奉ることに注目しました。 具体的には、先史時代の神まつりに供えるための器の姿、神社神饌（しんせん）の歴史の変遷と維持の精神、近代神社制度における神饌の状況、等の点に焦点を当て、関連する考古資料・文献史料を展示いたします。 展示資料 ・兵庫県行方家古墳出土土製品（加古川市教育委員会蔵） 【重要文化財】群馬県舞台1号墳出土遺物（国所有・群馬県立歴史博物館蔵） ・平城京出土関係遺物（奈良文化財研究所蔵） 【重要文化財】『賀茂社嘉元年間年中行事』（賀茂別雷神社蔵） ・『明治二年賀茂祭神饌備進員数供進指図並品目仕立帳之図』（本学蔵） ・『地方祭典』（本学蔵） ・『官国幣社特殊神事調』（本学蔵）
	企画展「いにしへの渋谷」	平成21年10月3日～平成22年1月11日	渋谷区教育委員会との共催事業で、鷺谷遺跡など渋谷区内で近年発掘調査された新発見資料を展示公開。本館所蔵の縄文土器10点を提供し公開。
	公開フォーラム「環状列石をめぐるマツリと景観」	平成21年6月20日・21日	祭祀遺跡に見るモノと心グループでは、社会構造や文化・伝統などの時代性や地域性を、祭祀研究の前提として重視するクロス＝コンテクスチュアル分析法（CCA）を採用している。そこでは、ランドスケープや「第二の道具」をはじめ、祭祀行為全般に含まれるあらゆる意味をどのように捉えることができるのか検討を行ってきた。 この分析方法は、地域性を重視し、環境・居住・生業・社会構造・文化等の歴史的脈絡を明らかにし、そこに祭祀を位置づけようとするものである。当フォーラムでは、その分析法を推進することを目的に、北海道森町、青森県青森市、秋田県北秋田市の研究者や関連する共同研究員を招聘し、新たな祭祀研究の方法を模索する研究発表と、各種の課題についての討論を開催した。 発表者（発表順） 阿部 昭典（客員研究員） 中村 大（本センター・共同研究員、総合地球環境学研究所） 加藤 元康（ボストク研究員） 國本 大（東京大学総合研究博物館） 石井 匠（ボストク研究員） 谷口 康浩（准教授） 佐々木 雅裕（本センター・共同研究員、青森県埋蔵文化財調査センター） 高橋 毅（北海道森町教育委員会） 児玉 大成（青森市教育委員会） 榎本 剛治（北秋田市教育委員会） 太田原 潤（本センター・共同研究員、青森県教育庁） 【講演】 杉山 林雄（センター長） 小林 達雄（客員教授） 【討論司会】 小林 青樹（本センター・客員教授、国学院大学初木短期大学）
	公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」	平成21年7月25日	本年6月から7月にかけて、伝統文化リサーチセンターで平成19年度から推進している文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の中間成果公開に関するシンポジウム・フォーラム・関連展示等
	公開講座「そなえを問う」	平成21年11月7日・11月21日・12月12日	第1回「古い神饌を考えること」 日時：平成21年11月7日（土） 14時～15時30分 場所：学術メディアセンター棟4階・コンピューター教室4 講師：加瀬 直弥（伝統文化リサーチセンター専任講師） 第2回「考古学からそなえを問う」 日時：平成21年11月21日（土） 14時～15時30分 場所：学術メディアセンター棟5階・会議室06 講師：加瀬 里美（伝統文化リサーチセンター専任講師） 第3回「近代の特殊神事と神饌」 日時：平成21年12月12日（土） 14時～15時30分 場所：120周年記念3号館3階・3307教室 講師：遠藤 潤（伝統文化リサーチセンター助教）
	ワークショップ「小学生のための考古学ワークショップ」	平成21年10月10日・10月17日・10月24日・10月31日	渋谷区教育委員会との共催事業 対 象 渋谷区内の小学校5・6年生 人 数 25名 講 師 内川隆志（准教授） 伊藤慎二（助教） 粕谷崇（渋谷区教育委員会） 堀江武史（文化財修復士） テーマ「原始時代の生活を体験しよう」 國學院大學考古学資料館にある多数の考古資料を使って考古学の面白さを小学生に知ってもらおう。実際に石器やアクセサリを作ったり、縄文食体験をすることによって原始時代の人々の生活を体験してもらおう。 1回目 「考古学って？」 2回目 「縄文アクセサリ作り」 3回目 「縄文アクセサリ作り」 4回目 「縄文クッキーを作ろう」

平成21年	英国ワークショップ	平成21年11月6日	ciety of Antiquaries', Burlington House (英国ロンドン) において開催。 発表タイトル・発表者 (1) 「The social and cultural contexts for the development of spirituality and rituals in the Jomon period」 谷口 康浩 (准教授) (2) 「Pots and ceramic figures」 石井 匠 (ポスドク研究員) (3) 「Jomon pottery as liminality」 中村 耕作 (助手) コメント1: ダグラス・ベイリー (セイントペリー日本藝術研究所・上級共同研究員) (4) 「Secondary tools in Circular stone alignments」 阿部 昭典 (客員研究員) (5) 「Complicated process of constructed monuments」 加藤 元康 (ポスドク研究員) (6) 「Remembrance of place」 手塚 美穂 (作業協力者) コメント2: 小林 達雄 (客員教授)
平成22年	企画展「伊豆半島・諸島における神社の成立と展開 - 祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から -」	平成22年5月10日～7月10日	主な展示品 第1章 大場資料にみる祭祀遺跡研究の足跡 大場啓雄博士資料 (本学蔵) 第2章 祭祀遺跡と古社の連続・不連続 静岡県下田市洗田遺跡出土資料 (本学蔵) 静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡出土資料 (熱海市教育委員会蔵) 第3章 神祇祭祀の淵源 千葉県市原市崎崎二子塚古墳出土資料 (本学蔵) 東京都大島町和泉浜遺跡C地点出土資料 (大島町教育委員会蔵) 第4章 在地信仰の展開 東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡・堂ノ山神社境内遺跡 (利島村教育委員会蔵) 東京都三宅村物見処遺跡 (三宅村教育委員会蔵) 東京都八丈町鳥打遺跡・宇津木遺跡出土資料 (八丈町教育委員会蔵)
	ギャラリートーク&セッション「伊豆の祭祀遺跡と神・仏」	平成22年6月23日	(1) 大場資料と國學院の考古学 中村 耕作 (國學院大學伝統文化リサーチセンター・助手) (2) 神まつりの「道具」と「場」 佐生 衛 (國學院大學伝統文化リサーチセンター・教授) (3) 黒潮圏のまつり 内川 隆志 (國學院大學伝統文化リサーチセンター・准教授) (4) 『三嶋大明神縁起』の世界 三橋 健 (國學院大學大学院・客員教授) 司会: 深澤 太郎 (國學院大學伝統文化リサーチセンター・助教)
	企画展「出雲国風土記とまつりの世界」	平成22年10月2日～11月27日	『出雲国風土記』に描かれた世界は、往時の様子を豊かに語ってくれる。島根県出雲地域は、神まつりをはじめとして、現在でもその様子を彷彿とさせる場面に触れる機会が多い。 『出雲国風土記』の記載をひも解きながら、また一方で遺跡やそこから出てきた遺物を見ながら、出雲国のまつりの世界に触れてみたい。 なお、本企画展は平成21年4月1日に締結した國學院大學研究開発推進機構と島根県教育委員会との研究協定事業の一環として開催される。『出雲国風土記』(本学所蔵) 美保神社出土土器 (美保神社蔵) 八重垣神社鏡池出土須恵器 (八重垣神社蔵) 等
	「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」シンポジウム『縄文人の石神—大形石棒にみる祭祀行為—』	平成22年10月9日	◆総論 9:30～10:10: 谷口 康浩 (國學院大學文学部准教授/学術資料館兼准教授) 「縄文人の石神—大形石棒の象徴的意味を解くために—」 ◆基調報告 10:10～10:50: 石井 匠 (國學院大學学術資料館ポスドク研究員) 「大形石棒の造形デザイン」(休憩) 10:50～11:00 11:00～11:40: 成田 美奈子 (國學院大學大学院博士課程前期) 「大形石棒の出土状況」 11:40～12:20: 中島 将太 (東京都杉並区教育委員会) 「大形石棒に加えられた行為」(昼食) 12:20～13:00 ◆研究発表 13:00～13:40: 大工原 豊 (群馬県安中市教育委員会) 「大形石棒の製作遺跡と流通」 13:40～14:20: 鈴木 素行 (財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社) 「大形石棒が埋まるまで」(休憩) 14:20～14:30 14:30～15:10: 長田 友也 (南山大学非常勤講師) 「石棒観察から読み取れること」 15:10～15:50: 山本 輝久 (昭和女子大学大学院教授) 「住居跡での石棒の出土状況」(休憩) 15:50～16:00 16:00～16:40: 中村 耕作 (國學院大學文学部助手) 「大形石棒と縄文土器」 16:40～17:20: 阿部 昭典 (國學院大學伝統文化リサーチセンター客員研究員) 「東北北部の大形石棒にみる地域間交流」(休憩) 17:20～17:30 ◇紙上発表 中村 豊 (徳島大学准教授) 「東部瀬戸内地域における大形石棒の出土状況—晩期後半を中心に—」 ◆討論1 17:30～18:30: 司会・谷口 康浩 総合司会: 深澤 太郎 (國學院大學学術資料館助教)

平成22年	フォーラム「出雲の祭祀を考える-祭祀の構造と空間-」	平成22年10月23日	趣旨説明 内川 隆志（國學院大學伝統文化リサーチセンター・准教授） セッション1 「祭祀の構造」 ・「美保神社祭祀遺跡のまつりの道具」 加藤 里美（國學院大學伝統文化リサーチセンター・講師） ・「まつりの道具の製作-美保神社境内遺跡の玉作関連資料を中心に-」 柳浦 俊一（島根県古代文化センター・専門研究員） 〈コメント〉 錦田 剛志（島根県神社庁・主事） セッション2 「祭祀の空間」 ・「集落景観と祭祀」 新原 佑典（國學院大學伝統文化リサーチセンター・ポスドク研究員） ・「古墳と祭祀遺跡から見る祭祀の主体」 西尾 克己（島根県古代文化センター長） 〈コメント〉 松本 岩雄（島根県教育委員会文化課長） 日時：平成22年10月23日（土） 13時30分～17時10分（終了予定） 会場：國學院大學渋谷キャンパス 学術メディアセンター 1階 常盤松ホール
	ワークショップ「小学生のための考古学ワークショップⅡ」	平成22年8月7・8日	渋谷区教育委員会との共催事業 対 象 渋谷区内の小学生 人 数 20名 講 師 内川隆志（准教授）・加藤里美（講師）・大学院生（博物館学専攻） デーマ 「まがたま作り」 原始・古代の装身具である「勾玉」の歴史を学び製作してみよう。
	公開講座「現代社会に見るモノと心 -縄文文化からの現代的価値の創出-	平成22年12月18日	講座内容 松田 陽「縄文土偶の英国での展示 -新たな文脈と意味-」 石井 匠「大阪万博と「太陽の塔」 -現代の祭り・偶像・モニュメント-」
平成23年	企画展「縄文人の世界観とカタチ」	平成23年1月24日～3月19日	展示の目的： 約4000年～3500年前の縄文時代後期の世界観の代表である環状列石と関連遺跡や出土資料を中心に、近年の研究活動の成果を総めて展示を行なう。 縄文時代の祭祀・儀礼の研究は縄文文化の根本的な理解の為に、欠かすことができないものである。モノからどのように心（世界観など）に展開するのか、様々な方法を駆使して、研究を行ってきた成果を公開する目的で開催する。 I. 縄文人 縄文人とはどんな人たちであるのかを提示します。 II. 北東北の環状列石展開前後 環状列石が展開する前の時代の様相と比較して、時代的な特徴を考えます。 III. 環状列石・配石 北秋田市伊勢堂岱遺跡や石倉岱遺跡の資料を展示し、環状列石や配石などで実際に出土する遺物やその特色を語ります。 IV. 世界観のカタチ 具体的にそこからどんな行為が描き出せるでしょうか？モノの分析などを通して、儀礼行為などカタチを解説します。 V. 縄文祭祀・儀礼研究の方向性 近年の研究動向を紹介し、今後の方向性について提示します。 ここでは、以上の流れで考古資料から描き出される縄文の祭祀・儀礼や世界観についてご覧頂きます。

細分展示に加えて、國學院大學の考古学の歴史を語るブースを設置した。殊に樋口博士の顕彰コーナーを設け、博士の生い立ちからその業績について実物資料をまじえながら展示している。

前述したように各時代の展示についてはORCの研究テーマである「祭祀遺跡に見るモノと心」に合わせて、旧石器時代から近世に至る各展示コーナーに「旧石器時代のかたち」・「縄文時代の心とかたち」・「弥生の祈り」・「古墳時代のまつり」・「古代の祭祀」・「中世の祈り」・「近世の祭祀」・「外国資料」という細分テーマを付して可能な限りの実物展示を行っている。中央には、埴輪群の露出展示、その四隅の柱に展示空間をとって世界の石器、ミニチュア土器、祭祀遺物のコラム展示をおこない、情報端末のモニター横のサイドテーブルには、それぞれの展示に合わせたトピック展示をおこなっている。また、説示情報の少なさは、各コーナーに設置した情報端末によって補い、さらに解説シート、研究員、学芸員による説明などによって補うものである。

年次毎の研究成果の展示は、主にエントランス横に設置された企画展示ゾーンで行っており、これまでの展示内容については一覧表に示したとおりである。特に規模の大きい企画として平成21年11月におこなった3グループ共催の特別展示「まつりの具―御食たてまつるもの―」で、本グループでは、上古

の神まつりに供えるための器の姿をテーマに、群馬県前橋市舞台遺跡1号古墳出土石製模造品、土製模造品（国指定重要文化財）をはじめ、平城京出土関連遺物、兵庫県加古川市行者塚古墳出土土製模造品など関係各位のご好意で、希少な祭祀遺物を展示することができた。

平成22年（2010）度は、これまでに実施してきた、伊豆半島・伊豆諸島、出雲、北東北関連の展示を行うと同時にそれと併せて各種講座やギャラリートーク、セッションなどのプログラムを実践した。又、教育協定を結んでいる。渋谷区教育委員会との共催による特別展示や「小学生のための考古学講座」などを実践し、地域との教育連携にも寄与している。海外における活動として、平成21年11月には、英国ロンドンのBurlington Houseにおいてワークショップを開催、平成20年12月18日には、研究協定を結んでいる英国セインズベリー日本藝術研究所の松田陽氏を招聘させて頂き「現代社会に見るモノと心―縄文文化からの現代的価値の創出―」をテーマに公開講座を開催した。

以上、伝統文化リサーチ・センター考古学部門の開設に至る経緯と現在推進している各種事業についてその概略を記した。本年度以降も更なる充実を目指して研究を充実させていく予定である。

（文責 内川隆志）